

5 零下三五度以下になると休み。囲碁などで過ごした。

6 平屋建てバラック、採暖はペーチカ、幅二メートル程度の木の寝台。

7 民主化教育はナホトカで二、三回。

九 抑留中の生活と極限状態における意識

1 満州へ残した妻と子供の安否を気づかない、生きて帰ることのみ念願する。

2 空腹時、何も食べなくても三十日くらいは生きて行けると我慢すること。

3 暖かくなり、ダモイを予測して元気で帰ること。

#### 十 帰 国

1 バルハシで帰還の知らせを受ける。

2 貨車に乗りオムスク、トムスクを通り東へ約一カ

月ナホトカに着く。

3 四五日後、遠州丸に乗船。

4 船内は平穩。

5 舞鶴港へ上陸、九月十日ごろと思う。

#### 十一 帰国後の生活

前の勤務地が新京なので仕事なく、老母、妻、子供と四人暮らし、米の配給の代わりに砂糖などにて芋と交換して、生活は楽ではなかった。

#### アングレンの思い出

石川県 吉野 藤 吉

(旧姓 高山)

若い血潮に燃えて七ツ釘の予科練へ。昭和十九年十月一日、乙種二十四期生として松山航空隊に入隊。南国とはいえ身を切るような海風で初めて凍傷になる。翌年三月、敵グラマンの急襲を受け、目前五メートルほどの所に二キロ爆弾が落ちたが不発弾で命拾い。松山から倉敷に移動。六月朝鮮へ転属命令。

忘れもしない六月十六日門司出港、幾許もなく黄昏迫るころ、六連沖で船の後部触雷と爆雷誘爆により、「アッ」という間に轟沈。私は戦友と二人上甲板にいて、爆風で吹き飛ばされ腰を強打して海へ「ドブン」。薄い板切れにすがって二時間ほど漂流、幸い通りがか

りの石炭運搬船に助けられ二回目の命拾い。この時の戦死者四十一人、ご冥福をお祈りする。

船には航空糧秣と新紙幣を積んでおり、札束がバラけて辺り一面十円札の海。ポケットに詰め込んで荷屋で乾かしていたが、班長たちにこの金は使えないと言って全部取り上げられる。着の身着のまま、敗残兵のごとく舞鶴へ帰って第三種軍装に整え、舞鶴港より再出発。深夜の玄界灘を「ヒヤヒヤ」しながら無事釜山港着。鎮海郊外の行蔵里で一般水兵と約一カ月猛訓練。

八月十日、北鮮元山航空隊乙基地に転属で、京城に到着した途端に空襲警報、緊急避難。アメリカがいよいよここまで来たのか？豆を撒くように爆弾が落ちてくる。少し凹地に避難するや爆発の地響きが近づいて至近弾で背中に激痛を受けたが、建物の破片だったので三回目の命拾い。翌日、初めてソ連参戦を知る。

元山では敵の上陸に備え水際特攻隊として猛訓練。今度は米国でなくソ連相手。八月二十二日、全員集合で終戦を知る。軍艦旗や機密書類を焼却して身辺整理。武装解除後、陸海軍混成大部隊がソ連の捕虜となる。

敵の先陣は囚人部隊で悪事の限りを尽くす。

私たち一個中隊ほどが本隊より離れたバラックの收容所に入る。ここの給食が最悪で、最初は高粱、次に粟（搗いてない）、これで全員フン詰まりになり、箸を削って互いに穿り出し合う。汚い、臭いは感じなかったが、早くも死者が出る。次に、軟らかな工業用（糊）、舌切スズメではあるまいし、またも犠牲者が出たとのことで興南港へ移る。作業は、ソ連が北朝鮮で略奪したあらゆる物資の船積み（船も日本からの略奪船）。

二十一年六月荷役終了で乗船命令。帰国に一縷の望みを持って疑心暗鬼で乗船。一夜明けたら「ナホトカ」。夢も希望も打ち砕かれて牛馬のごとく貨車に乗せられ、一カ月近い旅の終着駅は「ウズベク」共和国アングレン。疲れた体で揺れないベッドにもぐり込んだが、南京虫の人夜襲で一睡もできず夜が明ける。見渡す限り樹木のない丘ばかりの乾燥地帯。三月中旬ごろより十一月中ごろまで雨も夜露もなく、毛布を持って戸外で雑魚寝。望郷の念も空しく、見上げる満天の星空、煌々と冴える月光は、日々過酷な労働の中のせめても

の慰めであった。

「イスラム」教の土着民は髪も目も黒く、我々と変わらぬ相貌で人情豊かな人々である。私たち若い一個班は共産党「オルグ」から反動分子と睨まれ、懲罰として農村へ送られる。収穫期の砂糖大根の貨車積みで、一人で六十トン無蓋車満杯が「ノルマ」。貨車が入れば昼夜の別なく積み込みで、入らないときは丸々休み。「バザール」へ行って物々交換したり、女性の宿舎で遊んだりで一冬を過ごす。

二十二年春、世話になった彼女たちに別れを告げて原隊復帰。再び地獄の「ラボート」は、戦後、アングレン川に発見された石炭層の露天掘り開発のための河川改修工事であった。途中マリアにやられ、悪寒と高熱（四一度）でふらふら。人間、栄養不良が長く続くと「思考力・記憶力」が消滅して、牛馬に近づくことを実感した。

二十三年六月、思いもかけぬ帰国命令で「ダモイ」。天にも上る心地で「ラーゲル」に永遠の別れを告げて「ナホトカ」へ。乗船待ちのとき福井大地震の「ニュー

ス」があり、北陸は全滅と聞いて「ショック」を受けたが、生きて帰れる嬉しさは何ものにも勝る。

夢に見た故国、涙で見た緑の舞鶴の土を踏んだのは、昭和二十三年七月二十四日であった。

（彼の国に眠る英霊に合掌）

## シベリアの抑留体験

島根県 高尾敏教

私は大正十三年一月二日生まれます。

昭和十九年四月、満州国新京で徴兵検査を受ける。九月二十日鞍山市の満州第一二四部隊へ入隊した。

鞍山には、昭和製鋼所があり、これを敵の空襲から守るための監視と照空を任務とする、別名関東軍野戦照空第一大隊といった。一緒に入隊した五十名は全員満州在住者で、甲種合格者はわずかで、第一乙種合格者が多かった。

部隊の配置は昭和製鋼所を囲むように、中隊本部と